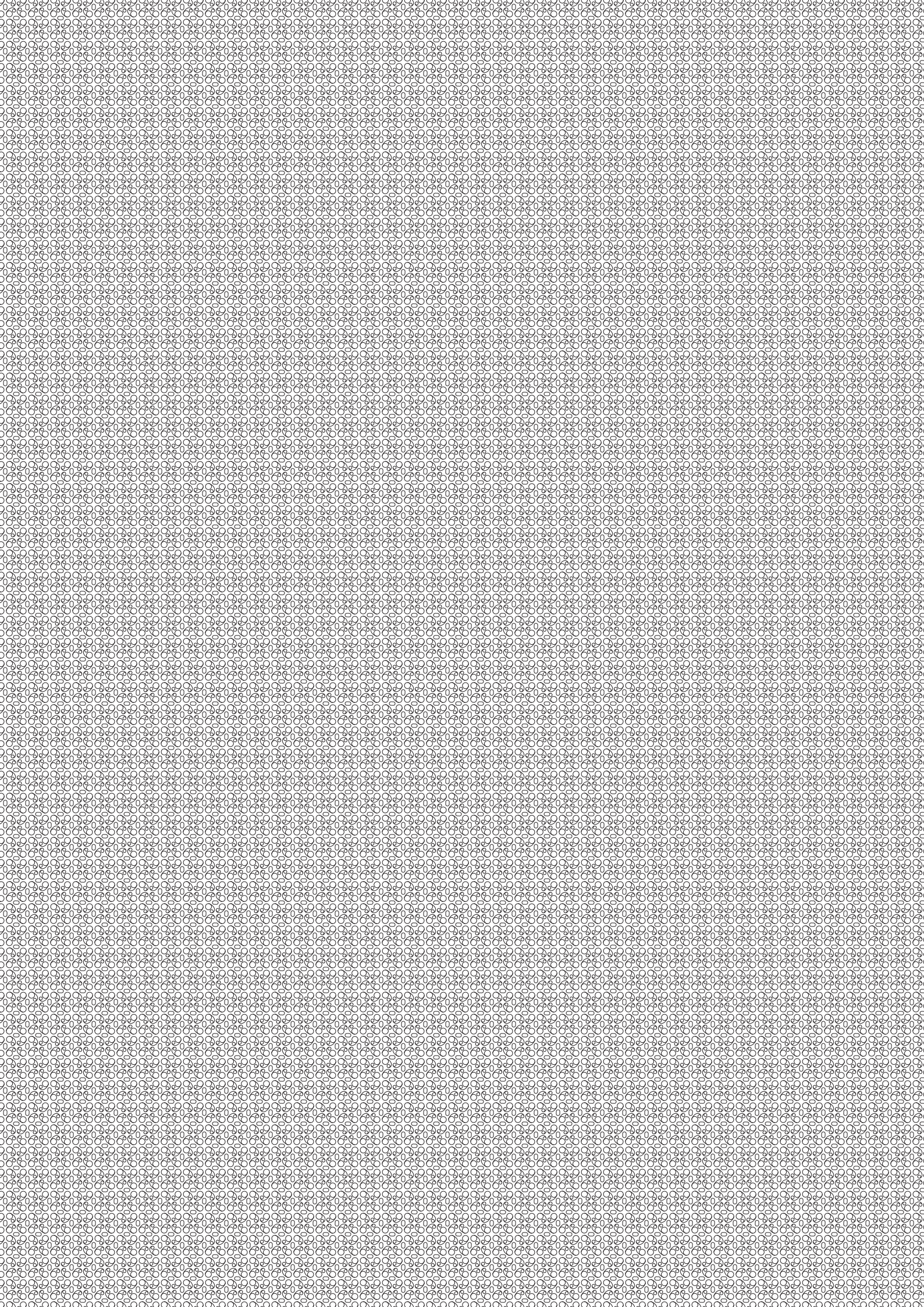


国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、19 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**や**。**や**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の **○** の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。



1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 役員として敏腕を發揮する。
- (2) よく学び、且つよく遊ぶ。
- (3) 岩礁にすむ生き物を調べる。
- (4) 人類の未踏の地を開拓する。
- (5) 困難に立ち向かうために、克己心を養う。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 交差点のリッキョウを渡る。
- (2) 親鳥がスバコに戻ってきた。
- (3) 学校のエンカクを調べ、年表にまとめる。
- (4) 三日間でノベ五千人もが入場した。
- (5) 山奥のチヨスイチで釣りをする。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

一年中休みなく田畑で働いてきた祖父が、病院に運ばれたという知らせが入った。駆けつける私（瑞穂）の頭の中に、ぱっと赤い花の映像が広がって消えた。幼い頃に預けられていた祖父母の家の畑で見たレンゲ草とはまた別の花だった。

面会時間が過ぎ、自分が付き添うと頑なに主張する母を病室に残し、私は祖母とあの大きな家に帰ることにした。助手席の祖母はやつぱり小さかった。シートベルトが包帯みたいで痛々しい。

(1) 祖母とふたりで戻った家も小さく感じられて私は戸惑った。古い農家だから、立派だとはいわぬめでも堂々としていた。それがなんだか急にみすぼらしく見えてしまう。その、みすぼらしいという言葉に自分でぞつとする。貧しいとか、ちっぽけなとか、そういうのとは違う。襖ふすまが煤すすけているような感じ、電灯の笠かさの上の埃ほこりが拭い切れていない感じ。歳としをとったふたりには大きな家が手に負えなくなっているのだ。家が悪いのではなく、つまり、住む人が家に追いつかなくなった。

翌朝、しばらく迷ったけれど、会社を休むことにした。祖父の具合は悪くはなさそうだし、この家からでも出勤できないわけではない。それでも、もう少しここにいて祖母の役に立ちたかった。私はあの頃の何もできない幼児ではない。祖母にはきつくなつた掃除の手伝いくらいはできる。それに、ここにいる間に赤い花の呼ぶ声をもう一度聞きたいとも思った。

赤い花、赤い花、と歌うように繰り返しながら私は欄間\*や高い簞笥たんすの上にはたきをかけ、障子の棧を拭き、床に雑巾をかけた。家はまだまだ

半分もきれいにならない。赤い花の正体もつかめない。レンゲ草より大きくて、華やかで、甘い匂いがする。祖母に聞いても知らないという。久しぶりにこの家の中をじっくりと見てまわって、台所に日めくりカレンダーがかけてあることに気がついた。一日に一枚、花の絵が描かれ、あとは日にちを表す数字と、その横に小さく曜日が入っているだけだ。カレンダーはいらん、といていた祖父の力強かった口ぶりを思い出す。

そうだよね、と私は光の射さない台所でコップに水を汲みながら、声を出してみる。祖父がカレンダーを気にしなかった分、祖母がひそかに気をつけなければならなかったこともあつたらう。(2) 一日分の日にちと、隣に曜日が寄り添うように書かれたカレンダーは、一日一日だけを眺めて暮らしていた祖父母によく似合った。

午後の面会時間待って病院を訪ねると、祖父も母も静かな顔をしていた。念のために祖父はしばらく入院することになるそうだ。

「なんでもねんや、大げさなんや。」

祖父は寝たまま笑ってみせ、それから真顔になって私にいった。

「瑞穂、仕事はどうした。」

「あ、今日はちよつと。」

「休んだんか。」

祖父の太い眉が寄せられる。気に入らないのだろう。

「明日は行くよ。」

私がいうと、傍はたから祖母も口添えしてくれた。

「じいさんを心配して休んでくれたんやがの。」

「おまえの仕事ちゅうのは、ほんない加減なものなんか。」

これならだいたいようぶだ、と私は思った。いつもの祖父だ。

それで、その日の晩、母と私は町へ帰った。判断を間違えたとは思わない。祖父自身がそれを望んだ。

次に面会に行ったとき、祖父は急速に衰えて、一日の大半を眠って過  
ごすようになっていた。祖母から容態の説明を受けながら、私はきつと  
泣くまいと心に決めた。そう決めておかなければ泣いてしまいかもしれ  
ない。働きづめで身体を壊し、入院してから初めて駆けつけて泣くよう  
なつまらない娘と孫しか持たない祖父が不憫だった。

それなのに、祖父の寝顔は思いがけず穏やかで、折れそうな気持ちを  
支えてくれる。

「今まで休まなさすぎたんだよ、少しゆっくり休んだらいい。」

動揺が少し落ち着いたところで、私は祖父にささやいた。聞こえて  
いるのか祖父の頭が小さく揺れる。

「それでまた元気になったら、いっぱい働けばいいじゃない。」

あわててつけ足す。祖父ならそれを望むと思ったからだ。

すると、祖父は目を覚ましたらしい。うっすらと瞼を開き、私を認  
めてかすかに微笑んだ。唇が薄く開く。何かをいおうとして震える。

「なに？ じいちゃん、水？」

祖父の口もとに耳を近づけると、祖父は小さい声で、でもはつきりと  
いった。

「……キト。」

「え、ごめん、なんていったの。」

「キ、ト。」

よく聞き取れない。困って傍らの祖母に助けを求めようとしたその  
瞬間、あ、と思った。キト。するするっと記憶のファイルが開いた。む  
かし、祖父の口から何度も聞いたキト、街の名前だ。

「そうだ、じいちゃん、よくキトのこと話してくれたよね。」

(3) 古いファイルの中から、街の名前と、高い山と、抜けるような青空、  
甘い香りを放つ赤い花が飛び出してくる。

「キトで遊んだの、楽しかったね。」

祖父は満足そうにうなずいた。

祖母の家に預けられていた頃のことだ。祖父は夕餉の後、私を膝の  
上に抱えて、キトという街の話をしてくれた。

その街は古代から栄えた都市で、赤道直下にあるのに、標高が高いた  
め暑くもなく寒くもない。一年中気温が安定していて、晴れた空には富  
士と見紛う美しい山がそびえている。めずらしい鳥が飛び交い、鮮やか  
な花が咲き乱れ、木々には赤い大きな実がなっている。祖父はまるで見  
てきたかのように街の様子を話し、幼かった私は夢中で聞いた。その街  
の澄んだ空気を胸いっぱい吸った気がする。

祖母の家を離れてからも、キトは私をなくさめてくれた。母の帰り  
の遅い晩、ひとりで蒲団に入って空想の街で遊んだ。その街にはちよう  
ど私と同じ年頃のきれいな女の子も住んでいて、すぐに仲よくなって走  
りまわった。さびしいときはいつでもキトへ飛ばばよかった。

その、キトだ。いつから忘れていたんだろう。長い間、思い出すこと  
もなかった。赤い花の影が脳裏に浮かんでからでさえも、レンゲ草まで  
しか遡ることができなかった。祖父は今、静かに眠っている間にキト  
で遊ぶことができているだろうか。それは、いいことなのか、さびし  
いことなのか、私にはわからない。

今夜はそばについていたいという私の申し出は母に却下された。

「だいじょうぶ、すぐにどうこういうことはないって。」

私の背を押す母の目には光がない。

「それより、ばあちゃんをお願い、瑞穂がすっかりついていてあげて。」  
そのとき、祖父が何かをいった。

「なあに？ じいちゃん、どうしたの？」

「ベリカード。」

祖父がかすれた声を出す。

「ばあちゃんに聞け。ぜんぶおまえにやる。」

そういつて祖父はまた目を閉じた。なんのことだかわからなかった。ばあちゃんに聞けと聞いていたけど、聞かれた祖母だつて困るだろう。

ところが家に帰ると、祖母は思いがけずあの街の名前を口にした。

「キトやと、懐かしいのう。」

「ばあちゃん、キト、覚えるの？」

祖母は意外なことをいった。

「覚えるもなも、キトやろ、忘れてりせんわ。」

「キトつて、むかし、じいちゃんが話してくれたお話に出てくる街だよ  
ね？」

「ほや、きれいな街やったの。エクアドルの首都やとの。」

「エクアドル？ つて、南米の？」

「赤道直下ちゆうてたな。ほや、ベリカードやったの、えんと、銀の缶  
に入つてたはずやけど。」

祖母は黒光りする簞笥の抽斗を上から順に開けはじめた。<sup>(4)</sup> 私の中の  
キトがぐらりと傾ぐ。

「キトつて、じいちゃんの頭の中の街じゃなかったの。」

自分の声が聞き取れない。たしかに、キトはあった。祖父の頭の中だ  
けでなく、私の頭や胸やきつと血液の中にもキトは入り込んでいただろ  
う。祖母も、もしかしたら私たちふたりの会話を聞いていたかもしれな  
い。だけどそんな話とは明らかに違う。キトはエクアドルの首都だと祖  
母はいつたのだ。

「あつたあつた、これや。」

錆の浮いた銀の平べったい缶を大事そうに取り出し、祖母はそのまま  
私に手渡してくれた。

固い蓋をこじ開けると、中に絵葉書大のカードが詰まっていた。端が  
薄茶色に染まっているものもあり、ひと目で古いものだと見て取れる。  
これがそのベリカードか。いちばん上の一枚を手に取り、裏を返した私

はあつと声を上げそうになった。

キト。キトだ。胸の中にあつたあの街にそっくりの風景がそこに写っ  
ていた。富士に似た、でもさらに鋭角な尾根が、青々とした空を背景に  
凜とそびえ、手前には澄んだ大きな湖がその姿を映している。

「キトつてほんとうにあつたんだ。」

夢の中の出来事がほんとうだったと知らされたような、祖父とふたり  
だけでつくつた架空の街が白日の下に曝されるような、緊張と弛緩がな  
いままになつてやつてきた。

「ベリカードつて、なに？」

そう聞く声がかからからに乾いている。思わず唾を飲み込んだ。

「ラジオ聴くやろ、ほの内容を書いてラジオ局に送るんや。ちゃんと聴  
いてたことがわかればラジオ局がベリカードを送つてくれる。」

受信の証明書のようなものと思えばいいだろうか。青い鳥の写真が印  
刷されたカード、見たこともない果物の写ったカード、満面の笑みをた  
たえた少女のカード、そして、赤い花のカード。

祖母が隣に腰を下ろす。

「懐かしい。これも、ああ、これもや、ぜんぶじいさんと集めた。」

アンデスの声、と日本語で記されている。キトのラジオ局の名前らし  
い。

「何の番組に周波数を合わせようとしてたんやつたか、たまたま飛び込  
んできた声があつての。」

そういつて祖母は目尻に皺を寄せ、手元の赤い花のカードをじつとの  
ぞき込む。

遠く離れた日本の片田舎で、祖父のラジオがエクアドルからの電波を  
受信する。現地の日本人向けの放送を偶然つかまえたのだろう。祖父と  
祖母はたぶん地図を開いてキトの場所を確かめた。そうして地球の反対

側まで、拙い受信報告書を送った。ペリカードが返ってきて、ふたりは心を躍らせる。幾度も放送を聴き、幾度も報告書を書く。そうして一枚ずつペリカードが届けられる。ふたりして目を輝かせてカードに見入ったことだろう。

そのときの様子がありありと目に浮かぶ。私を膝に乗せて話してくれたのは、たぶん祖母とふたりでじゅうぶん楽しんでその後だったに違いない。どこにも出かけたことなかった祖父母に豊かな旅の記憶があったことに私は驚き、やがて甘い花の香りで胸の中が満たされていくのを感じていた。

(宮下奈都「アンデスの声」による)  
新潮文庫刊

〔注〕 欄間——天井と鴨居との間に、採光・通風のために格子または透

かし彫りの板を取り付けてある部分。

不憫——あわれむべきこと。かわいそうなこと。

夕餉——晩飯。夕飯。

弛緩——ゆるむこと。だらしなくなること。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 祖母とふたりで戻った家も小さく感じられて私は戸惑った。とあるが、どんなことに対して「私」は「戸惑った」のか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

ア たった二人の暮らしなので、元々それほど大きくはない家ながら広々と感じられていたが、祖父の入院で気弱になつて祖母の様子に影響されて、一段と寂しく見えたこと。

イ 祖父の家は都会の家と比べて敷地が広く、かつて預けられていた頃の幼い私には広大に思われたが、久々に訪れて大人の目で改めて見ると、思いのほか小さな建物だったこと。

ウ 堅固な造りの清潔な家だったが、病室から戻ると家の中あちこちに小さな汚れがたまっていくことに気が付き、老夫婦だけの生活の苦労が身にしみて伝わってきたこと。

エ どっしりとたくましい印象の家だったが、住む祖父母が高齢になり隅々にまで手が行き届かなくなった様子で、大きさは昔と変わりが無いのに家構えが見劣りして見えたこと。

オ 長年の畑仕事の中で季節の巡るリズムが体に刻まれており、暦よりも自分たちの感覚を信じ、あわただしい世間とは一線を画そうとしてきた祖父母の暮らし。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 一日分の日にちと、隣に曜日が寄り添うように書かれたカレンダーは、一日一日だけを眺めて暮らしていた祖父母によく似合った。とあるが、「祖父母」のどのような暮らしに「よく似合った」と感じられたのか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 月ごとのカレンダーを嫌い、今日の日付だけが太い字で示された日めくりを好む頑固な祖父と、夫のこだわりを誰よりも理解し、尊重してきた祖母の暮らし。

イ その日その日に必要な農作業を何よりも大切にし、カレンダーに関係なく実直に働き続けた祖父と、傍らでそつと夫を支え続けてきた祖母の暮らし。

ウ 三百六十五日どの日も同じ時間に起き、食べ、眠る生活の繰り返しで暦など不要だと言う祖父と、時間の経過をひそかに意識してきた祖母の暮らし。

エ 長年の畑仕事の中で季節の巡るリズムが体に刻まれており、暦よりも自分たちの感覚を信じ、あわただしい世間とは一線を画そうとしてきた祖父母の暮らし。

オ 長年の畑仕事の中で季節の巡るリズムが体に刻まれており、暦よりも自分たちの感覚を信じ、あわただしい世間とは一線を画そうとしてきた祖父母の暮らし。



〔問3〕<sup>(3)</sup> 古いファイルの中から、街の名前と、高い山と、抜けるような青空、甘い香りを放つ赤い花が飛び出してくる。とあるが、「私」のどのような状況を暗示する比喩か。最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 長年埋もれていた記憶が勢いよく呼び覚まされ、昔何度も祖父から聞き、その空想で寂しさを癒やしてきたキトの街の光景と、咲き乱れる赤い花が、確かな存在感を持って鮮やかによみがえった状況。

イ 祖父の家の物置の奥に埋もれた懐かしいファイルの一冊に、キトという地名があり、若い頃の祖父が真っ青な空の下で美しい赤い花と一緒に写る写真が貼られていたことを、唐突に思い出した状況。

ウ 心配する家族をよそに、身体は病院のベッドに横たわったままの祖父の意識がキトの街を元気よく飛び回り、澄んだ空気に赤い花の匂いをたっぷり吸って生命力を回復し始めたことに気付いた状況。

エ 祖父の家で過ごした時期のたくさんの思い出が一つ一つ鮮明に浮かんで来て、地球儀でキトを探しながらどんな街かを想像したり、真っ赤なリング畑で走り回ったりした時間が脳裏に再現された状況。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 私の中のキトがぐらりと傾ぐ<sup>かし</sup>。とあるが、この比喩によって表現されているのは「私」のどのような状態か。五十字以内で書け。

〔問5〕<sup>(5)</sup> そういつて祖母は目尻に皺<sup>しわ</sup>を寄せ、手元の赤い花のカードをじつとのぞき込む。とあるが、「祖母」にとって「赤い花のカード」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 楽しみの少ない田舎暮らしの中、都会から預かることになった孫娘を喜ばせるために苦勞して手に入れ、三人で一緒に眺めながら同じ夢を見て幸せな時間を過ごした、家族のきずなが刻み込まれたもの。

イ 生きるのに精一杯の時代で、空想だけでも世界旅行を楽しもうとベリカード集めが流行していたが、これほど希少なものを入手できたのは自分たちだけだったという自負心で、今も心が満たされるもの。

ウ 外国の珍しいラジオ番組を聞くのを唯一の楽しみにして必死に働いていた日々が懐かしく、あの頃のように祖父が健康を取り戻し、再び二人で仲の良い暮らしに戻れるという期待を持たせてくれるもの。

エ 余暇を楽しむ余裕なく農作業に追われ続けた二人の一生の中で、異国の街との思いがけない接触に胸をときめかせ、祖父と同じ空想に興じ熱中した、夫婦のかけがえのないひとときを思い出させるもの。

〔問6〕 本文の波線部の表現に関する説明として適当でないものを次のうちより選べ。

ア 「ここにいる間に赤い花の呼ぶ声をもう一度聞きたいとも思った。」

は、幼少期の記憶の詰まった祖父母の家で、正体不明の赤い花の謎を明らかにしたいという「私」の願望を象徴する表現である。

イ 「聞こえているのか祖父の頭が小さく揺れる。」は、ゆっくり休むように言った「私」の言葉に対し、首を振って否定するようにも見える仕事であり、祖父の仕事への責任感の強さを象徴する表現である。

ウ 「そう聞く声がからからに乾いている。」は、祖父との秘密が周囲に知られていたことへの羞恥心と、正確な事実を確かめたい好奇心とが入り混じった、「私」の複雑な心理を象徴する表現である。

エ 「やがて甘い花の香りで胸の中が満たされていくのを感じていた。」は、働きづめだった祖父母の人生にも青春のような一時があったことに救われ、「私」が幸福感に包まれた様子を象徴する表現である。

## 4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

言葉は、それが話されている社会にのみ共通な、経験の固有な概念化なのです。もちろん、どのような言語を用いるにせよ、それぞれの言語によって分節される概念以前の現実が、言語の相違と関係なく、もともと同一の存在であることは疑えません。ただ、私たちがこの言語外現実を把握し、私たちを取り巻いている世界を区切り、グループ別に分け、カテゴリー化するのには、言語を通してである、ということなのです。

言葉以前の現実（こゑとま）は混沌とした連続体であって、私たちは自国語の意味体系のおかげで、この連続体の適当な個所個所に境界線を画すことができます。ところが、<sup>(1)</sup>言語によって意味体系が異なるのですから、言語がかわ変れば区切り方も変わってくるのは、当然でしょう。

たとえば、「木」とか「植物」とか「動物」という一般的な、しかも抽象的な性格をもつ単語が一切存在しない言語はたくさんあります。そうした言語には、木や植物の個々の名称、たとえば「松」「桜」「杉」といった語はあるのですが、「木」という概念がないために、それらをひとまとめにしてカテゴリー化することができません。

またある言語では、「年上」か「年下」かを同時に示さない「息子」という語が存在しません。不思議に思われるかも知れませんが、日本語でも、「年上」か「年下」かを同時に示さない男の兄弟を表す語が存在しないことを思いあわせてください。「兄」と「弟」のいずれも、フランス語の frère や英語の brother 以上の意味をになっているのです。

日本語の「木」は、机などを作っている材料でもあれば、庭の青々とした樹木でもありますが、フランス語では前者が bois、後者が arbre であることはご存じでしょう。それでは「材木」の意味の「木」と bois がびったり一致しているかというと、これもそうはまじりません。bois

frère	
兄	弟

## (例1)

フランス語  
日本語

arbre	bois
木	森

## (例2)

フランス語  
日本語

air		
空気	曲	様子

## (例3)

フランス語  
日本語

には「森」という意味も含まれているからです。図式化すると、二つの言語の意味のズレが表のように表せましょう。

右は、ごく簡略化した対応図であって、実際の意味の重なりとずれぐあいは、もっと微妙かつ複雑であることは言うまでもありません。また、右にあげた例はごく一部のものに過ぎず、いわば氷山の一角のようなものです。しかし、これだけでも、「言葉に依存しない概念も事物もない」というソシユール（\*）の考え方を証明するのに十分といえましょう。ソシユールはまた、「<sup>(2)</sup>事物を作り出すのは視点である」とも言っています。人間にあっては、言語習得とカテゴリー化・抽象化能力の発達とは同時進行的な現象です。この二つは表裏一体をなしていて切り離せません。

私たちは《記号》というどんなものを想像するでしょうか。たとえば数学で使われるさまざまな記号があります。+はプラス記号、-はマイナス記号でし、÷と×はそれぞれ割算と掛算（かけざん）の運算記号と呼ばれています。

そのほかにも=記号（等記号）や≠記号（不等記号）、∞とか「と

いったややこしい記号も少なくありません。どれをとつても何らかの数学的概念を示す符号であることにはかわりないようです。

学問の世界に限らず、私たちの日常生活には記号が氾濫しております。交通標識の図柄や赤・黄・青の信号にしても、すべて禁止や命令などを示してくれる記号ですし、・―は「イ」、・――は「ロ」、―・―・は「ハ」を表すモルルス信号、指を丸めて「OK」やときに「お金」を示すサイン、特定の社会では親指で「男」、小指で「女」を意味させるしぐさ、地図の㊸や㊹印がそれぞれ「学校」と「寺」を示す印である限り、これらもまたすべて《記号》の一種と考えられます。

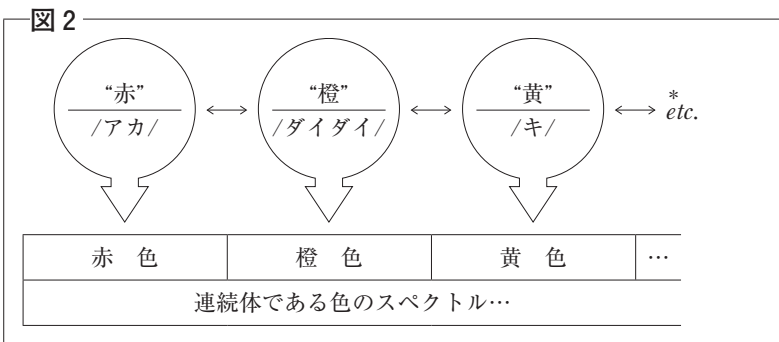
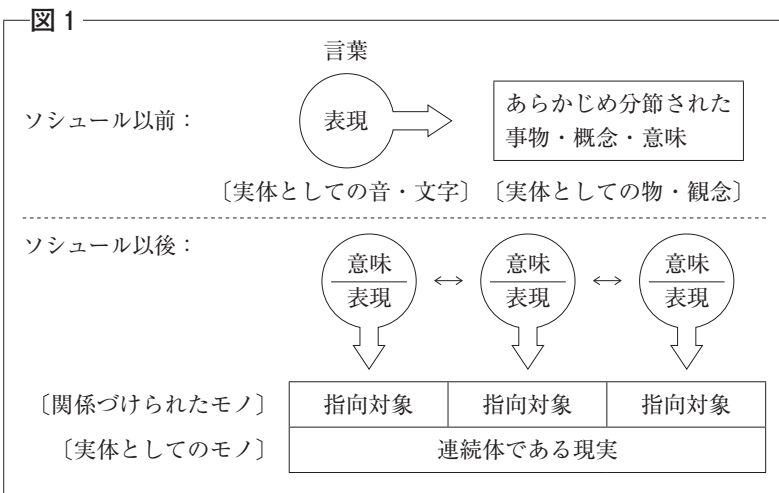
フランス語では記号のことを *signe* と言いますが、*signe* には「目印、徴候、予兆、合図、符号」などという意味があり、日常的には黒雲が嵐の *signe*、煙が火の *signe*、三十八度の熱が病気の *signe* というふうに使われます。そうしてみると《記号》とは、「直接に知覚できる事象で、知覚できない別の事象について、私たちに何事かを教えてくれる事象」とか、「自分とは別の現象に代<sup>かわ</sup>って、それを告知したり指さしたりするもの」と定義できるかも知れません。

ところが、こうした一般常識に反して、「言葉は記号ではない」という認識がソシユール言語哲学の根本にあるということを忘れてはなりません。ソシユールの影響を強く受ける以前のメルロ＝ポンティも次のように言っています。

「もし、*signe* という現象を、あたかも煙が火の存在を告知するように自分とは別の現象を告知する現象だと解すれば、まず第一に、言葉は思考の *signe* ではない。(……) 両者は互いに包み合っているものであり、意味は言葉のなかにとりこまれ、言葉は意味の外面的存在となっているのだ。同じように私たちとしては、一般にそう信じられているごとく、

言葉は思考の定着のための単なる手段だとか、あるいは思考の外被や着物だとかとは、とても認められない。」

「言語は事物の名称リストではない」という認識は、言葉が、言語外現実を指し示すものではなく、自らのうちに意味をなっているという理論を導き出します。言いかえれば、言語記号は、記号と呼ばれていても他の一切の記号とは異なって、あらかじめ自らの外にある意味を指し示すものではさらさらなく、いわば表現と意味とを同時に備えた二重の存在であるということです。わかりやすく図解すると図1のようになる



でしよう。

(4) 図1のソシユール以後の部分、具体的に日本語の意味体系を用いて図示すると、図2になります。

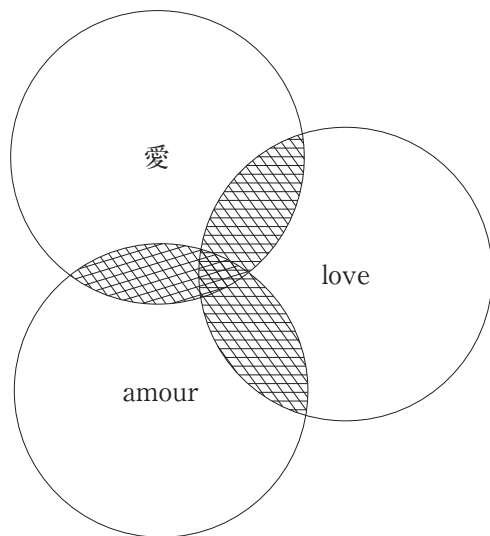
ソシユール以前は、言葉は《表現》でしかなく、図1の矢印が示すようにすでに言語以前からカテゴリー化されている事物や、言語以前から存在する純粹概念を指し示すもの（記号）と考えられていたのが、ソシユール以後の考え方は、言葉は《表現》であると同時に《意味》であり、これらはもともと存在しなかった関係でありながら、混沌としたカオスのような連続体人間が働きかける活動を通して生み出され、同時に連続体の方もその関係が反映されて不連続化し、概念化するという、相互的差異化活動こそ言葉の働きである、ということになります。

(5) 具体的な例に即して考えてみましょう。「鬼」とか「河童かわづま」とか「龍りゅう」などという言葉には立派な意味があります。ところが、これはあくまでも《言葉のもつ意味》であって、言語外のいかなる実体を指さして名づけたものでもありません。西欧の「一角獣」、「悪魔」、「神」などという概念にしても同様のことが申せます。指向対象というものは、言葉以前から存在する分節された実体ではなく、言葉の誕生とともに生れうまる「関係づけられたモノ」なのです。

これは何も空想的産物に限ってはおりません。たとえば「愛」とか「憎しみ」という日常不可欠な概念にしても、はじめからそのような一般的観念や心情が存在していて、「愛」の場合でしたらフランス人はamour, 英米人はlove, ドイツ人はLiebeと名づけをしているのではなく、異なつたいくつかの精神的態度の多様性を集めて一つ概念とするのは、この言葉があつてはじめて可能となります。<sup>(6)</sup>ソシユールの言葉を借りれば、「言語に先立つ観念はなく、言語が現れる以前は、何一つ明瞭に識別されない」のです。だからこそ、「愛」とloveとamourな

る意味範囲は、図3のように重なりあいながらずれている、ということができましよう。

図3



(丸山圭三郎「言葉とは何か」による)

〔注〕ソシユール——スイスの言語学者。

モールス信号——長短二種の符号を組み合わせてアルファベット、

五十音などを表す電信用の符号。

メルロ＝ポンティ——フランスの哲学者。

etc.——エトセトラの略号。その他。…など。

〔問1〕 言語によって意味体系が異なるのですから、言語が変れば区切り

方も変ってくるのは、当然でしょう。とあるが、このことを本文、及び（例1）（例2）（例3）の表をふまえて説明したものととして最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 家族の中に息子が複数いるという現実を、日本語では兄弟の年齢を重視して捉えているのに対し、フランス語では年齢よりも性別に重点が置かれるという違いがあるということ。

イ 材木、樹木、森という現実を、日本語は樹木と森を区別しても材木と樹木は区切らず、フランス語は材木と樹木を区別しても材木と森は区切らないという違いがあるということ。

ウ 日本語で空気、曲、様子と言葉を区別するのは、それぞれの性質が異なるからであるが、フランス語は異質な物でもひとまとめに表現する柔軟な言語という違いがあるということ。

エ 日本語は基本的に言葉が豊富で、世界を細分化して理解しようとする言語だが、フランス語は言葉に依存しないで、人々の想像力で意味を理解するという違いがあるということ。

〔問2〕 言語習得とカテゴリー化・抽象化能力の発達とは同時進行的な現象です。とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 概念を適切に表現できる言葉を発見した時に、私たちは混沌としている現実の中においても、自分と他者の考えを区別して表現できるようになるということ。

イ 母国語以外の言葉を勉強していかないと、私たちは連続体として存在している現実の物事を、正確に区別したり伝えたりすることができないということ。

ウ 新しい言葉を身に付けた時に、私たちは個々の物をひとまとめにして考えたり、他の物とは区別して理解したりすることができるようになるということ。

エ 幼少時において言葉が発達していかないと、私たちは言語活動を通して、具体的なものとあいまいなものを区別して考えることができないということ。

〔問3〕 「言葉は記号ではない」とあるが、どういうことか。このことを次のように説明したときに、に入る最も適切な表現を本文中から十五字で抜き出して書け。

運算記号や交通標識、地図の記号とは異なり、言葉はものだということ。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 図1のソーシャル以後の部分、具体的に日本語の意味体系を用

いて図示すると、図2になります。とあるが、図2はどのようなことを示しているのか。最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 現実には存在している色の、例えば赤色と橙色、橙色と黄色の境界は混沌としているが、私たちはそれぞれの色を意味する言葉を用いることで、別々の色として認識するということ。

イ 現実の世界では各色が独立して存在しているので、例えば赤色に見える色は「アカ」、橙色に見える色は「ダイダイ」と、私たちはそれぞれの色を名付けて認識するということ。

ウ 現実にはある色には最初から名前があったわけではないが、例えば赤色、橙色と表現することで、私たちは各色が連続体である色のスペクトルになっていると認識するということ。

エ 現実の生活の中に、例えば「アカ」、「ダイダイ」、「キ」と発声される言葉があり、私たちはあらかじめ区分けしておいた色に適切な言葉を当てはめて色の認識をするということ。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 「鬼」とか「河童<sup>かわこども</sup>」とか「龍<sup>りゅう</sup>」などという言葉には立派な意味が

あります。とあるが、このことについて筆者はどのように考えているか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 「鬼」「河童」「龍」という言葉から、私たちはそれぞれに共通する意味を見出すことで、指向対象の中にはもともと存在しないはずの実体を作り出してしまおうということ。

イ 「鬼」「河童」「龍」という言葉によって、私たちはそれぞれが表すものを理解できるが、それは実体を指さしたのではなく、各言葉が生む指向対象にすぎないということ。

ウ 「鬼」「河童」「龍」という言葉は、私たちに指向対象を理解させるものでありながら、西欧の「一角獣」「悪魔」「神」などと同様の概念を抱かせるものであるということ。

エ 「鬼」「河童」「龍」という言葉があることで、私たちは物語などに連続して登場する不思議な生き物たちを、指向対象として存在感があるものに捉えているということ。

〔問6〕<sup>(6)</sup> ソシユールの言葉を借りれば、「言語に先立つ観念はなく、言語

が現れる以前は、何一つ明瞭に識別されない」のです。だからこそ、「愛」とloveとamourなる意味範囲は、図3のように重なりあいながらずれている、ということができましよう。とあるが、このことについて、本文を読んだ生徒たちが話をしている。生徒AとDの発言をふまえて、本文で述べられている「言葉の働き」についてあなたが考えることを二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

生徒A 英語の「love」と日本語の「愛」の意味は同じだと思い込んでいたけれど、そうではないんだね。

生徒B うん。同じ部分もあるけれど、言語によって意味がずれているんだ。

生徒C 言葉が、元々ある感情やモノを指し示すために、後から付けられたものではないからだね。

生徒D 異なる言語を使う人の間では、世界の捉え方自体に微妙なずれがありそうだ。難しいなあ。



次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

万葉時代の山野は、木の花、草の花に満ちていた。水の流れは透きとおり、春にはそのほとりにさわらびが萌え、山吹が影をうつし、秋には、水面をくれないに染めて、もみじが漂い流れた。

万葉びとたちは、そんな自然をどんなに愛したのか。彼らにとって、自然とは外からそれをただ賞美するものであったり、生活の飾りにするものではなかった。もっと自分たちと一体になったものであった。森の中にくろがっている櫛の実を見れば、ひとりぼっちでさびしからうと思ひ、梅のつぼみを見れば、恋を抱えているのかと思つた。月光を浴び露にまみれて鳴くこおろぎ、枝もたわわな萩を胸で分けていく鹿。動物もまた彼らの友であつた。

万葉の春は、雪降る日の梅の花からひらいていく。

A 梅の花咲けるがなかに <sup>(1)</sup> ふふめるは恋か隠れる雪を待つとか

（四二八三 卷十九）

茨田王の歌。孝謙天皇の天平勝宝五年（七五三）の正月、石上宅嗣の家で宴会があつたときの歌である。

梅の花が咲いている中に、まだつぼみのままでいる花がある。そのつぼみの中には、恋の心を隠しているのであろうか。それとも、雪の降るのを待っているのであろうか。

その雪は春の雪である。恋か隠れるのその恋は、春を恋いわびる心でもあろう。

はじめて、この歌を読んだとき、<sup>(2)</sup> なんとハイセンスな歌であろうと、目をみはつた。

このパーティーのあるじ、石上宅嗣は漢詩の作者としても有名。たくさんのお書を蔵して、その書庫、芸亭は、わが国の図書館のはじめといわれる。

茨田王は中務省の次官をしていた人だが、きつと宅嗣の文学友達であつたにちがいない。この歌にも、なにか閑雅な漢詩の風合いがある。

梅の花に雪が降りかかり、花を白くおおつてしまふとき、こんな美しい歌を歌つた人がいた。「春雑歌」の中の「雪を詠む」歌。

B 梅の花降り覆ふ雪を包み持ち君に見せむと取れば消につつ

（一八三三 卷十）

作者不明の歌である。

梅の花を降り覆う雪を、梅の花ごとてのひらの中につつみこんで、あなたに見せようと何度も手に取るのだが、そのたびに、はかなく雪は消えてしまふ。

若い日にこの歌を読んだとき、梅は紅梅か薄紅梅だと思つた。そのほうが雪の白さが映えるからである。でも、実は、万葉の梅はみな白梅だそうである。

梅の白い花を、ふうわりと覆う雪のかすかな光。その風情を、そのまま恋人に見せたくて、作者はそつと梅の花を指先でつまみとる。そして、てのひらの中につつみこむと、つかのま、春の淡雪は夢のように溶けてしまふ。

作者は女性であろう。繊細なその指先、ほのかに紅みのさしたてのひら、体温のあたたかさに溶けてゆく雪。そして、梅の花ひとつが濡れて残る。

取れば消につつ。<sup>(3)</sup> ここがまた芸がこまかい。つつつは継続をあらわす助詞である。彼女は何度も雪に覆われた梅の花を摘みとる。で

も、摘みとるはしから、雪は消えていく。ぜひ、この花とこの雪をあの人に見せたい。そんないじらしい思いのこもる歌である。全体にやさしいささやきのような口ぶりがある。

この場合も、彼女にとって、梅の花は単なる外界の風物ではない。自分の魂を托して人に贈るための、大切なとおしい花である。

聖武天皇の天平二年（七三〇）正月十三日に、大宰帥大伴旅人の邸宅では、梅見の宴が行われている。大宰府に勤める役人たちが官の上下を問わず、詠んだ歌、三十二首がずらりと並んでいる。歌人として有名な山上憶良や沙弥満誓も詠んでいる。たくさんの歌の中で、どれがいちばん好きかときかれれば、私はやはり、この宴を開催した主人、大伴旅人の歌を採る。

C 我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

（八二二 巻五）

ひさかたの は、天 雨 月 星 雲 などの天上のもの  
ほか、光 鏡 都 などにもかかる。

わたしの庭に、梅の花がはらはらと散っている。いや、これは梅ではなくて、空から雪が流れてくるのだろうか。天より雪の流れ来るかも、この流れがたまらなくいい。ここで、この歌は個性の魅力を発揮した。うまい。

弧を描いてゆるやかに地に落ちてくる花。そのかなたにひろがる冬の澄んだ空。そのすべてを描きつくして、この流れ来るかもは受けとめた。

旅人の歌は、なにか悠揚せまらぬ、大人の風格がある。そして、そこはかとなないユーモアも感じられる。その彼の梅の歌をもう一首。

D 梅の花夢に語らくみやびたる花と我れ思ふ酒に浮かべこそ

（八五二 巻五）

こそは、希望をあらわす終助詞。

梅の花が夢にあらわれてこう言った。「私は優雅な花だと思えます。どうか、お酒に浮かべてください」

この歌は、ほんとうにしゃれた歌だと思う。みやびたるから酒に浮かべこそまでが、梅の花のことばなのである。夢にあらわれてきたのは梅の花の精で、おそらく可憐で上品な美人であったのだろう。梅の花の精がプライドに充ちて、私こそ、酒のさかずに浮かべるのに似合いの花よ、というところが、なんともほほえましい。

梅の花の精らしいものを登場させるのは、旅人の神仙趣味である。当時のエリートであった旅人は漢詩に造詣が深く、歌の中にもその投影が濃い。杯に梅の花を浮かべて飲む。なんと優雅なことか。シルクロードを渡って唐までやって来たヨーロッパの香りが、さらに遣唐使によって、奈良の都に運ばれた。そして、今、都を遠く離れた大宰府の地で、風流人の旅人はこんなモダンな歌を詠んだのだ。

石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも

（一四一八 巻八）

前書きには、志貴皇子の懽の御歌とある。懽は飲とおなじである。志貴皇子は天智天皇の第七皇子。石走るは石の上を走り流れるという意味。垂水は滝である。上は、この場合ほとりである。

石の上を走り流れる滝のほとりに、さわらびが萌え出る春の季節になつたなあ。

飲びの歌という、その前書きに、なんとふさわしい歌であろう。石の上を流れる水も、そのしぶきの末までが春めく光に躍るようだ。

(4) 滝の音も春の到来を告げるリズムに充ちている。その滝のほとり、水しぶきに濡れながら、今、萌え出しているさみどりのわらび。その清新なかわい姿。ああ、もう春だ。そう思うとき、作者の心はさわやかにみずみずしいさわらびと重なる。

石走る垂水の上のさわらびのごとと、一気に詠みくだし、萌え出づる春になりけるかもごとと、たつぷりと喜びをふくんでゆたかに受けた。喜びに軽く走らず、おおらかに、しかも喜びを抑えて歌った、プリンスとしての品格あふれる歌である。

うち靡く春来るらし山の際の遠き木末の咲きゆく見れば

(一四二二 卷八)

尾張連の歌。うち靡くは春にかかると枕詞。枯れていた木に葉が生い茂り、春風にやわらかに靡くからか。雰囲気のある美しい枕詞である。

春が来たらしい。山の間、遠くの小ざえの花が、だんだんと咲いていくのを見ると。

咲きゆく見ればがすばらしい。このことばには時間の経過と、それにもなう喜びがこもっている。おととい、ちらつと花らしい、白っぽいほのかな色がきざしているのを見つけた。きのうは、一つ、二つ、花が見えた。きょうはまたふえた。

花がすこしずつふえていくのを見ながら、彼の心は、春が来たという確認の喜びにふるえるのである。

(清川妙「清川妙の萬葉集」による)

〔注〕春雑歌——万葉集で春の分類に属する歌。

大宰帥——九州及び壱岐・対馬の二島を管轄した役所「大宰府」の長官。

悠揚せまらぬ——ゆつたりとして、落ち着いている様子。

大人——徳の高い、立派な人。

枕詞——特定の語句を導き出すために、その前置きとなる修飾語。

〔問1〕<sup>(1)</sup> ふふめるはとあるが、「ふふめる」の意味にあたる表現を、本文中

中から十字で抜き出して書け。

〔問2〕<sup>(2)</sup> なんとハイセンスな歌であろうと、目をみはった。とあるが、筆者はAの歌のどういふところに「ハイセンス」なものを感じたと言えるか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア このパーティーの主人の家にあるたくさんの蔵書を参考にして、片思いする自分とつぼみの固い梅の花とを重ね合わせて、正月の梅の花の様子を述べたところ。

イ 春が間もなく到来する予感を、梅の花が今にも開こうとする様子に例えていることに加え、わが国の最初の図書館である「芸亭」で詠まれた歌であるところ。

ウ まだつぼみのままの状態である梅の花に、ひそかな恋心が隠れていることを見抜き、まだ片思いでいる自分を、開花を待つ梅のつぼみに見立てて述べたところ。

エ 梅のつぼみを見て、ひそかな恋の存在や春の到来を待ちわびる思いを述べている中に、もの静かで落ち着いた、みやびやかな漢詩の雰囲気を感じられるところ。

〔問3〕<sup>(3)</sup> ここがまた芸がこまかい。とあるが、「芸のこまかさ」によって強調されているのは、Bの歌の作者のどのような心情か。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 梅の花に降り積もる雪を何度も手に取ろうとするが、雪はすぐに消えてしまい、全てが徒勞に帰してしまうことへの、切ない心情。

イ 何としても、この梅の花とそれに降り積もる雪の風情を、好きな人にもそのまま見てもらいたいという、けなげな愛情のこもった心情。

ウ 白梅の「白」と降る雪の「白」とが一体となり、辺り一面の真っ白で清らかな雪景色を好きな人にもぜひ見てもらいたいと思う心情。

エ ほのかに紅みのさした手のひら、その繊細な指先で梅と雪をつまむ、その美しい瞬間を好きな人と共有したいという切実な心情。

〔問4〕 C・Dの歌について説明したものとして、**適当でないもの**を次のうちから選べ。

ア Cの歌は、庭に散る梅の花を「雪の流れ来る」と言い表したところが面白い。「ひさかたの」という「天」にかかることばを用いて、はるか遠くから流れてきた雪と大胆に表現したところに、旅人らしさが感じられる歌である。

イ Cの歌に読み取れる情景は、冬晴れの空を背景にしてふんわりと舞い落ちてくる梅の花であり、その動きの流れに例えたことが見事である。また、「天より雪の流れ来るかも」と結ぶことにより、開放感が伺える歌である。

ウ Dの歌で、旅人の仙人のような遊び心は、漢詩の教養の深さからきている。異国から伝わってきた文化を、都を遠く離れた大宰府で味わうのは無念であったに違いないが、まさに官位の高さからくる風格が感じられる歌である。

エ Dの歌は、梅の花がことばを語るといふ設定が面白い。しかも、梅の精はかわいらしく自分を売り込んでくる。旅人の漢詩に対する知識の深さが投影されており、そこには旅人のもつ、大きな世界観までもが伺える歌である。

〔問5〕<sup>(4)</sup> 滝の音も春の到来を告げるリズムに充ちている。とあるが、志貴皇子の歌の「春の到来を告げるリズム」について説明したものとして最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 「垂水の上のさわらび」とは、「滝のほとりのわらび」のことであり、このようにことばで場所を限定することにより、山奥の春の様子を鮮明に描いている。

イ 「石走る」は「垂水」にかかることばであると同時に、この五音のリズムが「さわらびの」の五音の響きと連動して、心地よい飲びの気持ちを生み出している。

ウ 「石走る垂水の上のさわらびの」という「の」「の」「の」の律動は、よどみなくこんこんと流れてやまない、いかにも流動性に富んだ水の様子を描き出している。

エ 「なりにけるかも」の「かも」は詠嘆を表すことばであるが、「春になつたんだなあ」といかにもゆつたりと引き伸ばして、春の到来のうれしさを宣言している。

〔問6〕<sup>(5)</sup> 花らしいとあるが、この「らしい」と同じ用法で使われている文はどれか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 明日もまたいい天気になるらしい。

イ 最近、運動らしい運動をしていない。

ウ もっともらしい言い方をする。

エ 子どもらしい振る舞いをする。

2  
青

園

五  
日